

「希望を持って生きられる『この国のあり方』について」

～ 「この国のあり方に関する研究会」報告書のフロー ～

第1章 時代の峠で「この国」に漂う不安感、閉塞感

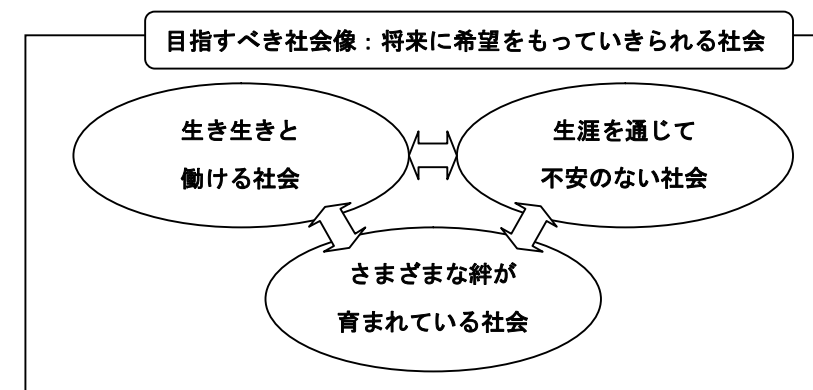
- 1 経済面から見た不安感、閉塞感 p 1
(産業構造の変化) (雇用形態の変化、貧困や格差の拡大)
- 2 社会面から見た不安感、閉塞感 p 3
(福祉国家の行き詰まり)
(ライフステージごとのセーフティネットの弱体化)
(家族や地域の絆の希薄化)
- 3 環境面から見た不安感、閉塞感 p 4
(自然環境の変調等に伴う不安感) (生活環境の変化に伴う不安感)
- 4 政治面から見た不安感、閉塞感 p 5
(既存の制度等に対する不信感) (「この国」の未来が展望できない閉塞感)
- 5 峠の向こうの「この国のあり方」 p 5
(峠の中の時代と国民の選択)
(「この国のかたち」ではなく「この国のあり方」)

第2章 「この国」の福祉政策と雇用政策

- 1 福祉国家の3つの類型 p 7
- 2 政府の大きさと経済的なパフォーマンス p 8
- 3 国際比較による「この国」の生活保障 p 9
(現物給付と現金給付)
(政策分野別の社会支出の対国民所得比)
- 4 国際比較による「この国」の雇用保障 p 11
- 5 国際比較による「この国」の生活保障と雇用保障の組合せ p 12
- 6 「この国」の雇用レジームと福祉レジームの崩壊と再生 p 12
(「大きな雇用レジーム」とその崩壊)
(「小さな福祉レジーム」とその機能不全)
(「この国」の政府の大きさ)
(日本型モデルの模索)

第3章 希望を持って生きられる「この国」のあり方

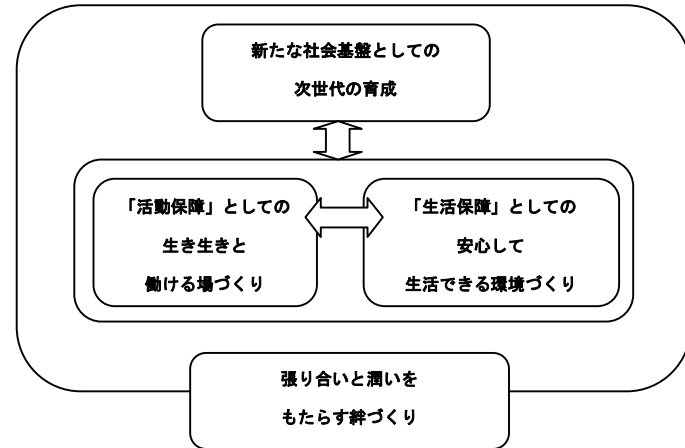
- 1 「将来に希望を持って生きられる社会」を目指して p 15



- 2 生き生きと働ける社会 p 16
(産業が元気で雇用が充実した社会)
(能力の発揮と多様な職業選択が可能な社会)
(再挑戦ができる社会)
- 3 生涯を通じて不安のない社会 p 17
(自立への道が開かれた社会)
(安心して子どもを生み育てられる社会)
(学びと教育に安心できる社会)
(医療と健康に安心できる社会)
(老後に安心できる社会)
- 4 さまざまな絆が育まれている社会 p 18
(家族や地域の絆が再生されている社会)
(自然との絆、自然を介した人との絆が再生されている社会)
(個性豊かな地域アイデンティティが継承・創造されている社会)
(多様な主体が参画・連携している社会)
(多様な交流による新たな価値の創造)

第4章 「この国」を実現する政策の方向

1 希望を持って生きられる社会を実現する政策の方向 p 2 1



2 新たな社会基盤としての次世代の育成 p 2 2

(子どもの健やかな成長を社会全体で支える)
(個の能力に応じたきめ細かな教育サービスの提供)

3 「活動保障」としての生き生きと働ける場づくり p 2 3

(新しい時代にふさわしい産業政策の展開)
(生き生きと働ける条件づくり)
(新たな視点の公共事業)

4 「生活保障」としての安心して生活できる環境づくり p 2 5

(自立 ~働く意欲がありながら労働市場から離れている場合~)
(健康・医療 ~疾病等で労働市場から離れた場合~)
(老後 ~定年等で労働市場から離れた場合~)
(環境 ~持続可能な循環型社会を次世代に継承~)

5 張り合いや潤いをもたらす絆づくり p 2 6

(家族や地域の絆の再生)
(多様な主体の参画と連携 ~年齢、性別、職業、地縁を超えて~)
(多様な交流による新たな価値の創造)

第5章 「この国」を実現する政府のあり方

1 公共サービスから見た政府のあり方 p 2 8

(現金給付と現物給付)
(給付水準とナショナル・ミニマム)
(普遍主義と選別主義)
(産業政策の展開)
(インフラ整備)

2 財政から見た政府のあり方 p 3 1

(国民負担のあり方)
(税制の改革)
(中央政府と地方政府の役割分担に応じた税源配分)
(財政調整制度、財源保障制度の確立)
(財政赤字)

3 信頼性から見た政府のあり方 p 3 4

(政治への信頼)
(負担の正当性)
(見返りの実感)